

## 外国語事情今昔

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 捷 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/7983">http://hdl.handle.net/10098/7983</a>

## テーマ これからの外国語教育を考える

## ● 巻頭エッセイ

## 外国語事情今昔

教育地域科学部 人間文化講座 林 捷

私が福井に赴任したのは1973年だから、今は昔、それもはるか昔の話。赴任当時、教育1号館の屋上から青田がかなり見渡せたが、今では13階からでも見渡せまい。こんな周囲の様変わり以上に変わったのは、外国語をめぐる状況だ。当時の福井に欧米人が何人住んでいたか詳らかにしないが、赴任後10年ほどの間に私が日常的に見かけた欧米人は、英語担当の米国人1人のみであった。彼は占領軍の文化機関に関係した人とかで、挙措も重々しく近づきがたい風貌だった。そんな事情もあってか、今から当時を思うと、鎖国時代とまでいわないにせよ、お雇い外国人が登場し始めた幕末から明治初期の感がある。大都市はいざしらず、地方都市は大なり小なり福井と同じような状況だったと思う。昭和も40年代だからそれはなかりろうと思われるかもしれないが、私の実感としてはそうだ。それほどまでに変化は激しかった。

この激変はもちろんグローバル化の結果で、情報革命がその推進役だ。高度成長期の頻繁で廉価なフライトや、何よりもインターネット網の拡大は、地球を限りなく小さくした。英語はもっと早いと思うが、ドイツ語に関していえば、ハンブルク大学から最初の留学生を迎えた1992年頃から状況は変わり始めた。それまでは金沢大学のドイツ人講師に週二コマの独会話の授業を依頼していた。福井にドイツ人が在住するのはこの留学生が始めてなので、学生のみならずドイツ語教師にとっても貴重な存在だった。彼とは毎週研究会をもち、会の後はきまって、今はない居酒屋「串八」で串かつを肴にビールを飲んだ。1995年にハンブルク大学と学術交流協定が結ばれてから、一挙に留学生の数は増え、毎年4名前後のドイツ人が福井で学ぶことになった。最初の頃、彼らは小中校や公民館からドイツの日常生活の紹介を依頼され、まるで客寄せパンダなみの物珍らしさで引っ張りだこであった。紋切り型の質問（刺身は？納豆は？）を幾度となく浴びせられ、最初は快く引き受けていた彼らもいざさかゲンナリしていた。最近はもの珍しくもなくなったのか、あ

まりお声はかからないらしい。総じてハンブルクからの留学生は勤勉で、日本人学生よりはるかによく勉強する。彼らにとって授業中、机にうつぶせになって眠る日本人学生は異様に映る由。精神的弛緩を曝け出しているようなものだから、さもありませんと思う。しかし彼らの生き方や学ぶ姿勢が、意識の高い何人かの日本人学生に大きな刺激を与えた例をいくつも知っている。こういう事例に出会うと、これぞ国際化の最高の果実！と私も感銘を受ける。こんな多士済々の留学生の総数は今年で43名を数え、ハンブルクに同窓会が結成され、その名も「越前会」。ハンブルク大学で学んだ福井の大学生もかなりの数に上る。長期留学はまだ一桁台だが、短期の語学コースは53名を数える。こちらも同窓会が結成され、ハンブルク都心の美しいアルスター湖にちなんで「倶楽部アルスター」と命名された。活動の詳細を記す紙幅がないので、詳細は以下のURLにアクセスされたい。<http://www.f-edu.fukui-u.ac.jp/~hayashi>

情報機器に疎い私は外国語を取り巻く変化にたまげざるばかりだ。衛星放送でドイツZDFのニュースを多重音声で視聴できるのに驚いたのは序の口。パソコンからクリアな音声でドイツARDのニュースが鮮明な映像とともに流れてきた時は感激した。留学生に教えられたスカイプでドイツの友人と交信した時も仰天した。彼の顔はもちろん、背景の書斎の細部もみてとれ、ドイツで発せられた声はほとんど隣室から聞こえてくる感じ。小学生の頃テープレコーダーの不思議さに驚いた私にとって隔世の感がある。若い頃からこんな環境のなかで外国語を学べる今の学生諸君を正直羨ましく思ったりする。

ただ物事には必ずプラスとマイナス面がある。情報化社会における情報の氾濫と地球の縮小化は、ひたすら効率を求める慌ただしさを伴う。Eメールは瞬時に地球の果てまで飛んでいくのですこぶる便利だが、航空便や船便を何週間も待った末に受け取るゆるやかな時空間の流れや詩情のひとかけらもなく、無味乾燥だ。

返事が直ちに返ってくるのでまた急いで返信し、更に返事が返ってくるせわしなさは、シジフォスの石運びの徒労を想起させる。国際化で学生諸君の発音や日常会話は格段にうまくなったが、テキストを訳させると、構文を掴めていないことがしばしばで、総じて概念の把握に弱い。授業が終わるとすぐにケータイを覗き込む学生たちをみるにつけ、いつも人と繋がっていないと不安なメール中毒患者さながらに思えてくる。大量の情報はまちがいなく人から落ち着きを奪う。

生活が複雑になればなるほど、思考は集中せず、拡散していく。現代に生きる学生諸君はそんな情報化社会の二律背反の危うさのなかにいるといえる。テレビやインターネットの情報の大半は無意味なおしゃべりといって過言ではない。学生諸君には、情報化社会の情報の藪の中に迷い込み、惑わされることなく、的確に情報を取捨選択し、恵まれた環境をフルに活用し、国際化の時代に備えて外国語の研鑽に励んでいただきたい。